

# 「外国語言語学」への提言

片 柳 寛

## 提 言 の 事 由

ここで「外国語言語学」（仮称）とは、外国語の発見、認識、理解、記述、解釈等に関わる事象の原理的追求と、その応用としての学習法ないし教授法を、言語学の一部門として認知し、そこに個有の原理と方法とによって、関係事象の学としての統一を目指す、科学的な作業と、その業績とする。

また、「外国語」とは、通常、母国語ないし母語と呼ばれるものの矛盾概念あるいは反対概念であって、いずれにしても特定の事象そのものの種別、あるいは名称ではない。いうまでもなく、外国語——対——母国語と言う座標軸で捕えようとする対象である「言語」そのものは、元来自然界の現象ではない。従ってそこで取り上げられるものは、自然科学の方法、ないしは博物史的な原理で採録し、観察されるような具象的な事実ではなく、むしろ人間の主観的な事実である。その研究はそのような主観的な認識を出発点とし、それに対応する客観事象の解釈と、処理に帰着するものと考えたい。もちろん、いわゆる「言語学」には、事実上は言語のイントリンシックな面の学と、そのエクストリンシックな面の学とが不即不離、ないしは混在の状態で共存しており、外国語言語学が、そのどの部位に

位置するかは判然としない。しかし外国語言語学が、言語についての学である事、言語学の一分野であることは定義上の事実と考えたい。

また言語学一般の世界で、すでになされた業績のうち、このような角度からの所見、あるいはこのような領域でなされた業績が膨大である事も事実であり、それらを、あらためて、この立場から一貫して配列し、説明しなおすことが、先づ着手しなければならない事であろう。

人間文化の特殊性と普遍性について、各種の論議がなされ、個人にとつてのその文化の意味と、その文化的所属の意味とが問題になつていると聞くが、言語においても人類言語の全事態の概括がなされると同時に、言語一般と特殊言語との関係が意識され、また典型的な一個人にとつて、言語が何であるかについての充分な認識が得られつつあるようである。またその言語が、事実上は特定の一言語であり、経験論的に、母国語ないし母語（以下「母語」と当該個人との関係および、母語と云うものの特性が、そうでない言語、非母語ないしは外国語との接触・対比において或る程度、明らかになつて来ている。

そこで「外国語言語学」は典型的個人が母語以外の言語に遭遇し、それを発見し、それとどの様な関係に入り、それが彼自身に如何なる変化を惹起するか、という主観的現象を何等かの方法で記述し、解析し、その機構を明らかにするとともに、対応する現象——言行為、言語心理、脳生理等の分野での所見、および、周囲情况としての所

属集団、文化環境等の観察などを含む一の解釈、処理にも関わるべきものと思う。

ひるがえって、言語学と外国語との関係は、従来は分立して、一見無関係の如くで、云うならば大学理学部と同工学部の如き関係であったと云えよう。言語学が、言語一般の原理の学とされているのに対し、特に「語学」と称された分野は、特定言語の知識と運用技術の獲得蓄積を目指した。応用の学術技能であるとされて来た節がある。歴史的にも現実にも各種の言語の存在と、それぞれの内容についての追求が両者においてなされて来たにもかかわらず、一方はそれぞれの言語を原理の一顕現例、ないしは資料として手段化し他方はそれ自体を目的としている。

然し、いずれの側にも人間的な事件として一つの人間の脳がその生理的、生活史的な時期と時間の軸の上で、各種条件のもとで逢着する外国語と云う主観的な事実については触れるところ少ない。問題点が、前者においては対象言語の資料価値に、後者においてはその効用と習得効率にすりかえられているの感が強い。いずれの場合も観測者、学習者は、建前として局外者であり、観察、体験の報告者ではあっても被験者もしくは標本ではない。

甲と云う一特殊言語を、一不特定者、普遍者として観察し習得するのが客観的態度であり、その報告が普遍的な記述であるとされるが、それは、乙以下の諸言語をそれぞれ母語とするものによる各種の観察、体験の抽象として、到達されるべきものであって、先取されるべきものではないように思われる。要するに「外国語」と云う

関係概念を軸としてその現象を取扱い、言語学の一部門の特殊化は起らなかったもののようである。

勿論比較言語学、或は対照言語学が念頭に浮ぶのであるが、これらもやはり普遍的な言語学の一相を取上げ、二言語あるいは多言語間の比較、対照を普遍的立場から、それ自体追及するものであって、それに関する個人の言語体験についての記述はその目的ではない。

しかし外国語言語学の実例として一方の言語を固定して、そこから他方の言語と接触する場合の諸相を把握する際の重要な資料を提供してくれることは充分期待出来る。

いずれにしても、言語学一般が「言語」の記述ないし獲得を目指しているときに、その内部で、「言語」と行為、体験する「人間」とくに外国語を大脳中に持ち込んだ人間の運命についての記述と理解を、我々は「外国語言語学」と呼ぼうとするのである。

また、広大な言語事象とその学問領域において、先述のような分野が「外国語言語学」として認知されても、実はその取扱い範囲と様相は極めて限られていることは云うまでもない。しかるに論者があえてこのことを提言するについての二、三の事由を述べたい。

その一つは今日我々がかってない濃密な外国語との接触情況下にありながら、それに対処するべき態度について言語的な立場からの明快な指針が得られていないと云うことである。例えば原則的な事項として外国語は、(1) 典型的な人間にとって、たとえそれが不可避かつ便宜なことであるにしても、本質的には任意の追加物でしかないのか、どうか。(2) 外国語と母語とは連続であるのか非連続で

あるのか。(3) 外国語は人間として不可欠であるのかどうか。という問い掛けに対してどの様な解答が与えられているのであろうか。

(1) については、それが世界の文化交流接触諸事態での必然であり、事実上不可避であるものようではあるが、母語で言語的に確立し、充足している個人にとって、外国語との関わりは言語的な事件なのか或は外言語的な事件なのか。外国語は一つの技能なのであるか、あるいは、習熟の度合にかかわらず当該外国語がその母語者にとって言語である限り、やはり言語であり、その事実からそれを学習する外国人は言語的に束縛されるのか。外国語との接触は、個人的な言語転換であるのか。この問題は第二の問いに連がる。然らば、典型的言語者自体は完全に同質、単一の母語と、異質侵入物としての外国語との間に并別の区画をもっているかどうか。関係両言語の類似・親近性との関連は。無言語の状態から、母語を習得する過程は、外国語習得の一種ではないのか。またあらゆる意識的な抽象思考、非言語的記号演算は一種の外国語運用ではないのか。ひるがえって外国語の習得は母語習得の道程の重複ないしは延長ではないのか。外国語の習得はその母語化に連続しているのか。或は言語的な帰化・同化であるのか。等々の問題は問われるのみで、それに対する回答はむしろ成功的な、或は不成功的な実例の提示に終っている趣である。外国語教授法の諸理論の大半はこの部類に入るようである。では、(3)の問題、即ち、この典型的な個人が、人間である為に、その意味の如何にかかわらず、外国語は不可欠であるかと云う問いは、形式的には第二の問題の解決を待たねばならない。

即ち、もし、人間の言語が本質的には非本能的な記号演算を内容とする限りでは、何等かの形の非母語、非自然語、ないしは外国語を内容とする事は定義上不可避である。また多くの大脳が外国語、非自然語習得の可能であることを事実によって証明している。しかもその限界は開かれたままである。少くとも潜在的に、可能性としてその様な能力を持たない大脳は人間の脳とは考えられない。但し、任意に、与えられ、或は選んだ外国語を或程度習得し、習熟すること自体が不可欠な人間的要件であるのか、或は単なる文化的、実的要請であるにすぎないかについては明らかでない。勿論、外国語教授の理論がこの点に少くとも儀礼的な言及をしないですむことは少いようである。そしてこの様な問題は、いずれも理念の次元に移されて、現実の処理に対する指示・方針を左右しているが、事実としての解明の努力に結実していない。

一方、最近の認識として、言語能の深層には人間的、普遍的な事実があり、それが抽象思弁の一般形式なのか、或は大脳の工学的所与であるのかは詳でないにしても、その普遍的な機構は、たまたま一つの特異言語の習得と云う系路、生活史によって定着し、深層ないしは変形過程の構成に至ると説明されているものの様である。かかる理解に立てば、外国語というものの遭遇、その克服はかなり末端的な手続の任意な習慣化、転移、転用の習熟と云うことになる、この様に理解してよいものであろうか。

現実的な問題として、我々に蔽いかぶさる外国語との接触情況は正に圧倒的である。しかもこの情況は日を追って進行するものと思

われるにもかかわらず何等、原則的な事項についての解明がなされないままに、経験論的、工学的あるいは功利的な立場からの理論と実際のみが追求され、主張されているのではないかと云う危惧を感じざるを得ない。

外国語、それが古今東西、或は架空のものであろうと、それを「何らかの理由で習得する必要がある」際に、何如なる方法が合理的、功率的かつ理想的であるかについて、言語学者は、経験により、多少の処方を行なうことが出来るが、人間的な言語の事態として、外国語の習得・教授・運用についての見解を述べることもなく、それを問われることもなかったのではなからうか。勿論、人間の能力を、小さいが無限なりとするのか、或は極めて大きいが無限なりとするかで答え方に違いが起って来るではあろう。

古来、民族の発生、移動、混淆、同化、衰亡とそれに伴う文化、なかんづく言語生活の歴史と、その記録は漠大である。しかし、それらの歴史の担い手であった、一人一人の脳中に生じた外国語と云う事件について、それをその様なものとしての観察、研究の記録は余り見られないものの様である。「何々は何々語に翻訳され伝えられた」とか「誰某は何国語に堪能であった」、「ラテン語がロマンス諸語に転換した」云々と云うのが歴史的な記述の典型である。歴史家は結果のみを見、今日の我々はその様な個人と、その産出のために、「外国語教育」なるものを大規模・無差別に行なっているものの様である。

確かに、外国語の学習、運用について人類の経験は豊富である。然

し、「外国語教育」の名のもとで投入するエネルギーとその効果との収支決算も行なわずに、経験と効果とのみを指標に、事態をこのまま進行させていいものであろうか。

与えられた分野が限られているにしても、「外国語言語学」は果してこの様な事態に対する問題の追求者、処分の作成者となり得るかどうかは疑問である。しかし、少くとも外国語の教師の一員として、この分野での何等かの独立した意識と、それによる立論がなされることを願ってやまない次第である。

#### 外国語言語学の内容

外国語学は、言語学、言語博物誌中の諸業績は勿論、言語学全体が依存する他のあらゆる学問分野から必要情報を集収し、そのうち特に「母語・外国語」という事態にかかわるものを取出し、独自の立場から、それらを整理し、解析し、解釈することから初まるであろう。

最近特に言語を中心として諸学問が相互に関連を持つようになり、全体的認識に、新しい段階の到来することが予感され、我々の関心事である外国語の問題も新しいアスペクトの下で出発できるのではないかと期待される。

かえり見れば、修辞学ないしは言語哲学として誕生した言語の学問は、文化・文学的な教養主義時代を通過し、記述的、科学的、ないしは構造的な科学として、二十世紀前半に確立した。それは客観

現象の学として、言語に内在する法則性の抽出と記述が主体で、別途に思弁、規範の学として発展して来た論理学、数学とは相互に吡喩的な関係に立っていたと云えよう。その段階では、対象としての、或はその「場」としての言語行為者、「人間」は捨象され、記述完成の際には消去されてしまっている。また近傍の、言語心理学の取扱う言語活動は、発現した事態のみを事実とし、被験者側の内的事実の記述と報告とは常に脚註にしかすぎなかった。現象背後の作動機構に触れることがあっても、それは一つの架空であり、現実説明の便宜であった。

二十世紀後半に至って、論理学はタグミクスへと進展する等、現存各学問は、大脳生理学、情報理論、電算器理論等の新学問とも合流し、それぞれの提示する人間言語の諸相は、記述として、あるいは模式として、次第に類同、合致して来たようである。

「生成変形文法」と云う名で世に出た言語思想は、言語の最も言語的な部面を、記述と假説とを合併した形で、捕え提示するに至った。その論述は、科学主義的な絶対真理の解明記述としてではなく相対的な効果の達成・向上を目ざした、技術論、工学論的な姿勢を凝している。かかる新しい言語把握の方式は、一方では上代の規範的言語学に回帰しつつも、爾後の文化的・科学的言語学の堆積を踏まえており、我々に少くとも今の地点から逆行することを許さない。

この様な新しい地平に立って「外国語言語学」はどの様な任務と持場とを与えられるであろうか。

詳細を知るわけではないが、聞くところによれば、すでに古典となっているチョムスキーの、当初の見解は、現実の言語から想定した理想言語、有限言語を出発点とし、現実言語はその個別的、極限近似であるとして、一般の論述を倒置して展開する。その様な言語の「場」としての話者は、一種の言語機械であり、その内在機序を「文法」と名づけ、それが恐らくは現実の文法の発動諸相と合致するであろうと云う期待を条件に、大部分の言語生活者の共感と、追認をもって、その有効性の根拠、その真理性の傍証としている趣がある。

そこでは観念化され、典型となった「言語者」が、彼の模式化された言語と共に、先取されている。また言語者の生活史、その他の主観的な内容は捨象されている。『母語者が正しいと認める文のみを限りなく作り出し、それ以外の文を作り出さない』機械、ないし機構がその母語者自身の模型である点に一つの吡喩のトリロジイがあるのではなからうか。その点では、これもやはり普遍言語学の立場であって、「外国語言語学」が出発点とする「話者個人」に関する現象としての「場」が与えられてはいない。

然しながら、この様なシミュレーション方式による「間接解明」の方法は、二言語間に跨がる言語活動のシエマを作図する方法を示唆したと思われる。翻訳機械の仕様は、ある意味ではその様なものの実例であろう。但しそれが一個人の行なう翻訳行為の記述、ないし体験と一致するとは限らないし、それが二国語併用者のモデルであるとも云えないのではなからうか。

一方その後の同理論の発展は、さらに「言語的普遍」への指向を進めていると聞く。この点についてはすでに触れたが、言語の顕現形象が深層の事実の任意・義務兩変形および、分岐を経た、終末としての表層であるとする考え方は、一特殊言語についてののみならず、言語一般に道を開いた。全言語の、深層における普遍的性格、組成、その構造を想定し、それに対応する内的外的単位事象の認証にまで及ぼりとする勢である。元来「人間の言語」は人類の同一性と共に、一つであり、母語はたまたまその基幹であって、外国語はその「同義異体」として、深層の普遍言語からの変形・生成の終末部ないしはそれに近い表層部の変換ないし転輸技術として習熟されたものと考えられそうである。これは、例えば漢文法に極めて習熟した日本人が中国文（白話文）を目読している過程に比することもある。

かくて、生成変形文法は、新しい意味での普遍文法を生み出し、その一面として、外国語学の位置を決定するかのように見かけられる。しかし、モデル思考の運命として現実との検証が困難なのではないだろうか。有限であり、かつ完全、自足した二国語併用者の実際が、二台の言語機械の連動体なのか、一台の言語機械と、付加的な翻訳装置なのかについてはこの理論は答える義務をもたないのであるか。それが不可能なのであるか。現実にはあらゆる種類と段階の二国語併用者が存在し、彼等についての症例的な研究も、可成り行なわれている事も事実である。しかし、それについての生成・変形文法的な立場からの実証的な調査は見られない。

生成文法の例文がほとんど常に創作例であり現実例でない点に御気付の向もあると思う。

構造言語学が、主として外国語の学習、運用に与えてくれたものが、ボタン・ブラクティスであったことは、その背後にスキナー張りの条件反射を基盤とした機械的、「反応人間」の像があった事を示唆する。そこには「条件づけの効果に比例した結果」があると云う、結果論、経験論に支えられた教授法があるのみである。

外国語の習得・運用の能力も、他の技能と同様、他の条件が同じであれば、その効率は恒常で、達成度は投入エネルギーに正比例し、無限に可能である。しかも現実にはあらゆる種類の、あらゆる段階の不完結な到達例が存在している。

それにしても構造言語学が「外国語としての何々語の教授法」、ないしは「何国語を母語とする幼児！或は成人！に対する何国語教材」等を産出したことは注目し得る。

外国語言語学の立場からすれば、それが個別的な教授法であった点が惜しまれる。構造言語学は、外国語習得の本質的意義については関心を持たなかったのである。外国語の発見と解明に出発したヨーロッパ現代言語学、アメリカの言語学が遂にその点に論及せずに終っている事を、我々日本人が追求するのは誤りなのであるか。日本では「英語教育」と云う呼称についてさえ何等の疑義も感じられていないこの現実はとにかくとして。

外国語言語学が原理の追求の学として、その方面で、どのような解明と、貢献を為してくれるかについての期待もさることながら、そ

の応用の学として「外国語との関わり方」、なかんづくその習得・運用の面への処方期待するところが大きい。

人間の教育のうち、すぐれて言語の教育が不可欠である事については言を要しない。そしてその言語の教育・訓練は母語でまずなされている。次に、それが不可欠であるか、不可避であるかは別として、外国語との接触が起ることを予想した教育、よりよき接触のための教育、等々が言語の教育の一面として、母語の教育と相併んで行なわれる。また肯定的・功利的に事態を捕えた、技術的な教授法の研究も進んでいる。然し、外国語学が何等かの形で「外国語」の問題についての原理的なものを規定してくれるまでは、外国語教授の現実には、教授者・被教授者の個人的、主義・嗜好によって左右される他はない。

構造言語学がこの点で、我々に寄与してくれた面についてはのべた。新言語学と云われる言語学がこの面で如何なる手掛りと、素材・教材を与えてくれるのであろうか。それは決して単なるティーチング・マシンのプログラムではないであらうと期待する。

その発見・論述あるいは決論は、現行の教授法を肯定し強化するものに終結するかも知れない。新言語学による「何々語の何何人に對する教材」と云うものはまだ聞くに至っていない。すでに英語の新文法による教授法を、日本人教師が日本人生徒に対して、行なっている例もあると聞く。この様な試みは、少くとも、中学一年生向の外国語教科書が、当該言語の母国語児童小学一年生向教科書の借用であるかのような我々の事態を改善するには役立つであらう。

心理学・生理学、その他の学問分野の最新の成果が、二国語併用の現象について新しい光を投げつつある。人間大脳の性能がある程度まで測定され、その機構にも多少の解明がなされて来た今日、限られた生活時間と、各種の環境におかれた個人が、襲い来る「外国語」と云う言語的な事態に、どの様に対処すべきかについて、或る程度結論が出せる時期が到来しているのではなからうか。

「外国語の発見、認識、理解、記述、解釈およびその応用としての学習法、ないし教授法を、言語学の一部として認知し、そこに個有の、原理と方法によって関係事象の学として統一的、科学的な作業」をする人々からの報告を、我々現場の外国語教師は待ち望んでいる。

母語の教師と共に、外国語の教師が先づ「外国語」に目覚めなければならぬ。外国語言語学はその覚醒のための学問とならう。外国語の教師は、その外国語に忠誠を誓った亡国者ではない筈である。個人にとって、民族にとって、言語接触・言語干渉は負担であるのか、解放となるのか。今後に対して正しい方向を求める事が果して無駄であらうか。

外国語は我々にとって不可避であるが、果して不可欠な能力であり、訓練であるのか。原理的な追求とそこから生れる処方とが待たれる所以である。

思うに、我国の言語体験史は、文明國中特異なもので、少くとも、その千年にわたる中国語の同化の過程は、西欧諸国におけるラテン語の同化の過程とは質を異にしている。またその文化史・民族史の単一性は、その言語の単一、ないしは同一性を醸成し、日本人の宇宙像が一元的であるように、その言語体験も、言語観も絶対主義的であると思われる。この点で西欧の大陸的な言語意識―相対的な言語体験とは、対蹠的であり、西欧では反対的概念として受けとられる、「母語と外国語との対立」は、我国では矛盾概念として受け取られている。

その為に西欧人には想像出来ない外国語事情が、現在日本に汪溢しているにもかかわらず、西欧事情に明るい筈の外国語教師がそれに安住している。

しかし、今日我々がこの我々の文化を、西欧の文化に対比するものとして再認識するとき、我々のこの外国語事情についての特殊な体験、ないし反応は、必ずしも文化の後進性にあるのではなく、西欧とは異った文化世界が発見し、逢着した新しい人間体験であり、本来であれば西欧側もそうしたものとして直面すべきものではないかと思ひ到る。

我々は外国語教師としてせめて外国語言語学の報告者、調査者、被験者としてでも、この外国語との遭遇の体験を内省し、記述し、自分なりの解明をしておくことが、第一の任務であり、それを通して

て、人間の言語の問題一般に対する一層の調査への貢献が出来ればと思う。

古来言語の移動において、移動の達成と同時に、受容側の投入した人間的・大脳のエネルギーの質と量とは、文化史のバランス・シート表面から姿を消してしまうことになっている。外国語習得・運営の場合も、母国人から気付かれない程同化する事が目標であるかの如き印象は未だにこの分野から拭いさられていない。

我々の現在の外国語体験は、その運命的な、絶対的な遭遇と云う意味で、西欧世界で起った言語接触の相対的な遭遇と異なる。我々の外国語言語学への覚醒は、客観主義的ないしは科学主義的な、西欧の言語学とは再び相反するかも知れない。

然し、世界の文化は、外国人によって誤解され、高買ひされることによって普遍化し、発展して来た事実を思うとき、外国語との遭遇と対決についての我々の特異な経験と所見とは、何かと人間言語の解明に寄与し得るものと思う。

今日、日本において、外国語教育がかくも広範に、一般化して行なわれているのに比して、その基盤としての原理的な追求の貧困はその重大な欠陥になり得ると思う。外国語の教師と、教授法の専門家は、その努力が言語学的に根拠のある、少くとも教育的、人間的な努力であるための保証を要望している。

以上、「外国語言語学」の内容について、何等のその実体の開陳もなく、ただその必要性についてのみ述べて来たが、その様な学問分野確立への要請を、現場の声としてここに発言して、広く同学の

士の共感と御支援とを要請する次第である。

西日本言語学研究会第一回大会  
における講演

## Summary

### TOWARDS LINGUISTICS OF NON-NATIVE LANGUAGE

The encountering of a non-native language as human experience is perhaps as old and as common as that of the native language. The matter, along with that of bilingualism, has been, of course, known to linguistics and to other branches of science with its nature and problems well clarified and classified in a proper perspective..

The present exhortation, however, is not towards institution of a new branch of science; it is rather a request for a new way of observing and managing the situation. As a matter of fact, this is an appeal from a Japanese teacher of a foreign language--which happens to be English--to his compatriots in his own country where the said language is being taught and learned with a phenomenal vehemence and an astounding anti-realism.

Some basic questions are, accordingly, being asked without answers proposed; e.g., if 'a' language is necessary and sufficient for human intelligence, what is then the need and use of a 'foreign' language, and if it is only for utility --other considerations being equal--is efficiency and economy in its acquisition all that is to matter, etc.?

Because of the different past, the experience of a non-native language to the Japanese has been and still is a confrontation, whereas it is more or less a compromise to the Westerners. Related facts and theories so far known should be assembled and re-arranged to align ourselves better against or for any 'non-native' language to humanity under the heading of 'linguistics of non-native language'.

Kan KATAYANAGI

[ A lecture originally presented at the first convention of the Society,  
Nov.28,1971, Hiroshima]